

『

だめカンタービレ』といえ、クラシック音楽をテーマとした目下大ヒット中のマンガである。しかし、作者の二ノ宮知子に『GREEN』—農家のヨメになりたい』（講談社）という作品があることは寡聞にして知らなかった。このマンガを原作にしたドラマが数年前にNHKで放映されていたことも知らなかった。

『GREEN』は、都会の調理師学校に通う主人公のワコが、農家の息子マコトに一目惚れしたことからはじまる恋愛コメディである。ワコは、毎週末、マコトの実家のある秩父の家まで、農作業の手伝いに押しかけ

る。そこで知り合った農家の人たちとの人間模様の中で、ワコは「農家のヨメ」になるための修行を積んでいく。二ノ宮知子ならではのパワフルなギャグ満載の農業ラブコメディである。

『のだめ』でクラシック音楽を聖域から引きずり下ろして、庶民的で現実的な音大生の姿を描いた二ノ宮は、『GREEN』でも、農業や農村暮らしを理想化するような安易な描き方をしていない。ネタバレになるのではありませんが、ワコの想い人

旅の曲者

48

農業マンガを読む

文・写真／田中真知 Tanaka Mochi

イラスト／bozen

のマコトは、実はただの農家の息子ではないし、マコトの幼なじみの農園の息子は、「農業はバクチだ」と豪語して、1粒200円のイチゴをつくって一攫千金を夢見る野心家である。現在の農家の厳しい現実や、農村の濃い人間関係も描かれていて、なかなか面白かった。

そこで、農業をテーマとした、いわば「農業マンガ」というのがほかにあるのかどうか調べてみたところ、いくつか見つかった。ひとつ目は、その名もずばり『COMET』(原

作・日高トミ子、漫画・松本タカノ講談社)である。副題に「ニッポン稲作アドベンチャー」とあり、コピーには「本気農業マンガ」とある。『COMET』も『GREEN』と同じ、基本的に恋愛コメディである。『GREEN』では都会の女性が農村に憧れるというパターンだったが、こちらは、青森の農家から大学に行くために上京した純朴な青年・武藤恵が、六本木のクラブで働く秋田出身の美女「こまち」に片思いするという筋立てである。農業人同士の恋愛

なので、話もデュープである。恵は病気になる父に代わって農家を継ぐために青森に帰るが、そのとき、同じく故郷で米作りをするつもりでいたこまちが、研修の目的と一緒についてくる。

青森の十戸とよのという架空の農村を舞台に繰り広げられる濃密な人間関係の中で、理想主義の恵と、現実主義者のこまちとの米作りをめぐる冒険が楽しい。グラマラスで、ミニスカートにブーツの絶世の美女が米作りに命を賭ける設定はやや無理を感じ

なくもないが、まあマンガなのでそこはよしとしよう。

無農薬栽培をやりたいという恵に、こまちはなぜ無農薬なのかと問う。「もちろん消費者に安全でおいしいお米をお届けするため」と優等生的な答えをする恵に、こまちは、そんなのはタテマエだ、私が無農薬をやろうと思うのは、そのニーズがあるからだ、数十年後、米の生産力は今の100分の3、日本の主食は輸入米になる。旨くて安全な国産米は稀少品、米1粒が黄金1粒の値段

で売られるようになる、それが私の計画よと、こまちはいう。

ドタバタ・コメディではあるけれど、作品の根底には、いまの日本の農業に対する強い危機意識がある。親や祖父母の世代が培ってきた知恵を生かしつつ、新しい時代へ対応できる農業をめざすには何が必要なのか、その問いかけが作品の背景に通奏低音のようにたえず鳴り響いている。物語は幻の米「米魂」の栽培と、恵とこまちの恋を中心に進んでいく。過疎化する農村の無慈悲な現実も丁寧に描かれた読み応えのある作品だ。ここまで真つ正面から米作りの現実を見つめた作品は、小説も含めてこれまでになかったのではないか。

つぎの作品は純粋に農業マンガというより農大マンガといった内容だが、個人的にはいちばんのお気に入りだ。雑誌連載当初『農大物語』というタイトルで始まったのだが、2回目から『もやしもん』(石川雅之/講談社)と改題された。

主人公は、もやし栽培農家の息子・沢木。彼はなぜか生まれつき、菌が見えるという特異な才能を持つ。この才能に目をつけた農大の教授・樹の研究室でくりひろげられる抱腹絶倒な大学の日々が描かれる。生物学やバイオテクノロジーの説明



『GREEN』『COME!』『リトル・フォレスト』は完結済。『もやしもん』は現在4巻目までが刊行中。

がときに数ページにおよぶこともあるが、うんちくものにありがちな分別くささとは無縁だ。あくまで、この作品の基本はギャグである。沢木の見る菌は、それぞれ独特のキャラクターとして描かれ、ときにそれが画面一杯に広がり、コミカルにして、シュールな世界を創り上げる。

カナディアン・イヌイットの発酵食品であるキビヤックが登場する。これはアザラシの腹の中に、海鳥を数十羽詰めて、そのまま土に埋めて2年ほど放置して作るというものである。これを掘り出して、アザラシの腹を開け、鳥の肛門からすっきり発酵（腐敗）して、どろどろになった内容物をすするといふ、聞いただけでも怖ろしい食べ物なのだが、そう

した思いがけないエピソードが、乱舞する菌と、癖のある登場人物とともに紹介される。

なんととっても、菌や微生物の世界が、いかにわれわれの生活と密接にかかわっているかに驚かされる。

「農というだけで辛くて厳しいイメージを持たれるけれど、ひとことで農学といっても幅はとて広い。生

ゴミを微生物で腐葉土にするゴミ箱も、加熱水蒸気で油を使わず唐揚げをつくる電子レンジも農学に端を発している。かなり最先端を走る学問

でもあるんだ」という作中の言葉に、なるほどなあという思いを強くした。「かもすぞ〜」という菌のつぶ

やきが、思わず口をついて出てしまう。このマンガを読んだら、きつと農大に行きたくなるはずである。

最後は、『リトル・フォレスト』（五十嵐大介／講談社）。これはマンガというより、イラスト付きの詩と

いった趣の美しい作品だ。東北の小さな村における、文字通りのスローライフの日々を淡々と描いている。

都会暮らしに疲れて、田舎に帰ってきた若い女性の視点で、農業をしながらシンプルに暮らす日々が綴られるが、実際には田舎に移り住んだ作者の日々そのものの描写なのだろう。

「自分自身のからだですら実際にやったことと、その中で自分が感じたこと、考えたこと。自分の責任で話せるってそれだけだろう。そういうことをたくさん持っている人を尊敬するだろ」という作中の台詞も味わい深い。

おいしそうなスローフードもたくさん紹介されている。

こうして挙げてみたら、全部講談社の作品だった。講談社は農業マンガに力を入れているのだろうか。ともあれ、いずれの作品もノスタルジ

ィや理想化から農業を取り上げるのではなく、いまの農業の現実を見据えた上で、何ができるのだろうかという視点から話が創られているのがい

い。実際に農業に携わる人たちは、これらの作品を読んで、どのような感想を抱くのだろう。



田中真知

たなか まち

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に『アフリカ旅物語』（北東部編・中南部編、凱風社）、「ある夜、ピラミッドで」（旅行人）、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』（凱風社）、「惑星の暗号」（翔泳社）など。